

【座談会】

コミュニティ福祉学部の震災復興支援の取り組み

～コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援プロジェクトを語る～

Reconstruction assistance by the College of Community
and Human Services in the Tohoku Earthquake disaster areas
- An account of reconstruction projects

森本 佳樹 松山 真 和 秀俊 荻生 奈苗
MORIMOTO Yoshiki MATSUYAMA Makoto KANOU Hidetoshi OGYU Nanae

森本 コミュニティ福祉研究所が紀要を発行するというので、3.11以降、学部が総力を挙げて取り組んできた東日本大震災復興支援プロジェクトの経緯、到達点と課題について、座談会を開くことになりました。当初の責任者ということで、私が司会をします。最初のプロジェクトの委員長ということでもあるので、最初のうちは司会をしながら話すことになります。

今年の4月から松山先生が委員長になりましたが、松山先生も、実際に現地に入った教員としては湯澤先生と並んで早かったと思います。そういうことと、ぐんぐんこのプロジェクトに注力していったという辺りの話もあとでお伺いしたいと思います。

それから和先生はコミュニティの専門家ということで、私にとっては最初に、一緒に行ったのは7月だったでしょうか。7月初旬に行き、陸前高田と気仙沼を見てきたときに、いろいろなことを感じられたと思います。その後ずっと継続的にプロジェクトに関わってきていただいています。

それから荻生さんは学生としては、コミ福や立教の活動ではなかったと聞いていますが、かなり早い時期に入って、いろいろなことを感じて、6月に学生主体の復興支援団体、学生支援局 Three-Sを立ち上げた一人です。

「3.11」直後～何を考え、どう動いたのか～

森本 現在でもまだまだ感じとしては復興の「ふ」の字もいっていないし、私たちの支援もどこがどう役に立っているのかが感じられない部分も多いと思いますが、この2年ちょっととこれから7～8年くらいの先までの、合わせて10年ぐらいを見据えて座談会をしたいと思います。

最初に、地震が起きたとき、それからそのしばらく後、みんな実際に動き出すまでどんなことを考えていたのか、そして自分に何ができると思っていたのか、その辺りのことで先鞭^{せんべん}を切ってどなたか、一番早く動いた松山先生からお話しいただければと思います。

松山 3.11のときは大学の研究室に居ました。相当揺れたので外に出ました。誰にも言われなかったのですが、取りあえずちょっと学内を見て回ったほうがいいかなと思って、学内の様子を少し見て歩きました。プールの水が道路の方まであふれて出ていたぐらいで、かなりすごかったです。その後ネットでニュースが見られるようになったので、ネットでニュースをずっと見続けていました。電車が全部止まって大学から帰れないということになったので、大学が帰れない学生を泊らせることになったと聞いて、その宿泊の様子を見にいきました。そうしたら1部屋しかあけていなくて、男女一緒だということで、女性の部屋を作ってほしいという要望をしたり、カップラーメンを大量に買いに行ったりしました。その後自分も研究室で一晩明かしました。

その後は、個人的な研究の計画が3月一杯あって動けなかったのが、被災地に行きたかったのですが、行かないでも出来ることがないかといろいろ考えました。福島県のソーシャルワーカーたちともう20年来の付き合いがあって、その人たちがかなり心配でした。病院はこういう時には、患者さんが殺到したり大混乱になるはずで。被災地のソーシャルワーカーの役に立てないか考えていました。当時、厚生労働省や経済産業省などがいろいろな法律を改正して、保険証を持っていなくても病院にいけば全部無料にするとか、介護保険の介護度が分からなくても介護サービスを受けていいとか、自動車税を全部減免するとか、いろいろな手続きの簡略化や税の減免など、3月11日の当日から出していました。そのネットの情報を私が要約をして、被災地のソーシャルワーカーにメールで送るということを始めました。たまたま福島県のソーシャルワーカーの理事たちのメーリングリストに入れてもらっていたので、そこに送れば主要な人たちのところに情報が届くということで、それを使わせてもらって情報を出していました。ですからほとんど1日中家か大学にいてネットを見ていました。法律文は非常に長くてややこしいのです。被災地の人にはそれをいちいち読んでいられないだろうと思い、5行ぐらいに要約して、それを送り続けるということ、3月15日ぐらいから始めて、7月ぐらいまでずっと続けてやっていました。

3月の終わりごろでしょうか、私は大学に、大学7号館の会議室を福島から逃げてきた人たちの避難所に設定してそこを開放したほうがいいと言ったのです。そうしたら学生は被災地に行か



松山 真

なくても大学に来るだけで支援活動ができます。毎日活動しなければならぬことなので、ちょっと言い方は悪いですが、毎日学ぶチャンスが出てきます。そのように大学が貢献できるのではないかと言いました。大学は設備が整って冷暖房も効くいろいろな備蓄もあるし、避難所に設定さえすれば避難物資は届くわけですし、支援する人間はたくさんいるし、避難所としてはいい場所なのではないかと思っています。

ところが大学は、本当に動かなかったのです。私はそれにすごく腹が立って、「それなら被災地に行ってきます。」と

言ったのです。あとから教授会があるとかいろいろ言われたのですが、「知りません。いつ帰ってくるのかわかりません。」と言って行ってしまいました。

森本 そのことについては、今の課題なのか今後の課題なのか分からないけれども、池袋キャンパスの広域避難所を大学が返上したということに対して、Three-Sの人たちが池袋を避難所に復活させるという活動をするという話がでているので、それを楽しみにしています。

松山 でもとにかく被災地に行きたいという思いがあったので、3月の終わりの頃に募集していたところに取りあえず応募しました。4月7日から活動があったのですが、前の日の6日から仙台に入りました。友人が仙台市の職員をしているので、そこで情報をいろいろ聴いた上で活動しようと思って仙台に行ったのです。ただそのときはかなり大きな余震があったときなので、仙台市のホテルなどが全部営業できなくなっていましたし、何があっても自己責任というふうに連絡を受けて、自分の車で行きました。

その後1週間避難所で、朝から夕方までずっと滞在するというボランティアでした。何をすると決まっていないのです。避難所の体育館と一緒にいて、したほうがいいたろうなと気付いたことについて、自治会や市の職員に提案して一緒にやるという、そういうボランティアをやっていました。

それが終わってから、自分の車で行ったので、せっかくここまで来たからと思って、石巻のほうへ移動してあちこち見て回りました。帰りに郡山に寄って、ソーシャルワーカーたちと顔を合わせて無事を確認しました。そのときも避難所に行きました。ビッグパレットという2,000人ぐらいその当時いたのですが、中を全部回って見せていただきました。そのときまたま社会福祉士会やケアマネ協会などの各会長さんが夜集まるという話があって、一緒に来てくれと言われて、四つの協会の会長と一緒に話しました。ビッグパレットは何も管理されていない本当にひどい状態で、衛生もひどかったです。仙台の避難所は非常に管理されていて衛生状態も良かったので、それに比べてあまりにひどいということで、専門職が入って何とかしなければと、いろいろな話し合いをしました。

それからいわきのほうへ回りました。いわきではある病院が自主的に避難所を回っていたのですが、その巡回チームに入れてもらって、避難所を3カ所巡回するのに付いて行きました。いわきはもっとひどくて、原発のことがあってボランティアも来ないし、自衛隊も報道関係も全部逃げていましたので、誰も来ない中で地元の高校生がおにぎりを握って届けているとかそんな状況でした。何もできなかったのですが、そういうことを見せていただいて、4月22日ぐらいに帰ってきました。

これはやはり何か動かないとまずいなと思ったし、大学生という時間がある人がこんなにたくさんいるのだから何とか組織できないかなということは考えていましたね。

森本 では次に、和さんはどうされていましたか。

和 3.11は先生方と一緒に、このキャンパスで過ごし、震災を体験しました。私がおのときに思ったのは、まずこのコミュニティ福祉学部の教員であるということです。個人としてはあれもやり

たいこれもやりたい、こういうことができるのではないかと思ったのですが、やはりコミュニティ福祉学部の教員という立場で、どういうことができるのかということはずっと考えていました。そのときにこうしたプロジェクトが立ち上がりました。そこに参画させていただけるということで、これでコミュニティ福祉学部の教員として何かができるのだと思いました。それでは何ができるかということですが、一つは現地でどういうニーズがあってどういう援助が必要かということをしかりと把握しながら、この学部のプロジェクトとして何ができるかということを考えることができ、実際に学生や先生方と一緒に取り組むことができると思いました。

それとやはりコミュニティ福祉学部の学生は思いがある学生が多いですから、その学生たちが支援に行きたい、ボランティアに行きたい、何かやりたいといったときに、では教員としてそれを受け止めて、どうやってそれを繋げることができるか、そういうことをやりたいなと思っていました。

森本 ではお待たせしました。荻生さん。

荻生 私も3月11日に大学にいて、その年の春休みに初めて学校に来た日だったのですね。サークルの新歓の備品説明会のために来ていて、大きく揺れました。そのときは焦ったのですが、少し経つと「どうせ武蔵野線は止まっているよね」というような、「動き出すまで何して待とうか」といったのん気な感じでした。それで新座駅に移動したら「今日はもう電車は動きません」となってしまっていました。電車が動かないと私は帰れないので、新座駅に漫画喫茶があるので行ってみたらほぼ満員で、私が最後の一人といった感じだったのです。それでテレビを付けてみたら津波の映像が流れていて、上のほうにテロップで、浜に2,000体の遺体が打ち上げられて、など出ていました。その映像が衝撃的でこれは大変なことが起きてしまったというのを思ったのを、今でもすごく覚えています。それから家に帰って、春休みが延びたりして、その中で何が自分にできるだろうと考えてみたのです。

個人的なことですが、2011年2月に起きたニュージーランドの地震があったときに、私はオーストラリアにいて、その時にも割と身近なところで大きな地震を体験したという経験があって、他人事には思えなくて。何ができるだろうと考えてみたのです。しかしどう探しても思いつかなかった。情報をいろいろ見ても、そのときに求められているのは医者だったり看護師だったり自衛隊だったり、専門的な技術や知識がある人しか求められていなくて、学生を必要としているところなどどこにもなかったのです。その時に絶望というか…学生って何もできないのだなと思いました。それまで自分は大学にも通っているし福祉も勉強しているから、こういったことが起こったときに何かしらできるだろうと思っていたのですが、何もできない現実を突きつけられて、とても落ち込みました。それからまた1カ月ぐらいつと悶々と考えていたのですが、そのときに4月末ぐらいに、ふとしたきっかけで避難所調査のボランティア、各避難所を回ってそこで必要とされているものや特別なニーズを必要としている人を把握してくるというボランティアを見つけて、それに参加してみたのです。その時の活動は話を聞くのが主なのですが、実際被災された方から、被災した当時の体験や、今避難所に入れているが全然眠れないとか、今はいいけ

れど今後の生活が不安で仕方ないなどという話を聞いて、これは本当に大変なことが起きてしまったということを肌で感じました。東日本大震災の復興のためには多くの人が復興支援に携わり、活動に参加して、それを継続していくことが重要になるのだということを感じてこちらに帰ってきました。

プロジェクトの成り立ち

森本 私はそのころ一生懸命、プロジェクトの構想を作っていました。

松山 そうですね。仙台から帰ってきたらそのプロジェクトが立ち上がったから入れと言われました。そのプロジェクトが動きだした辺りは私は分からないので先生お願いします。

森本 松山先生もそうですが、私も、阪神のときに少し現地でお手伝いをした経験と、もともと社協の職員としてコミュニティワークやボランティア活動を知っていたので、震災直後すぐに何かするというのは、年も年なので、現地に行って肉体労働できるということもないので、しばらくは何ができるかというのを長期的に考えようという感じでした。阪神のときを思い出しながら、何とか戦略というかそういうものを考えながら情報収集をしていたというのが直後ですね。

それからずっと反原発の運動をしてきているので、地震、津波というよりも、むしろ福島に対してどう動くべきかということが自分の中では大きなものでした。そのときは正直、学生と一緒に現地で何か活動するような話になっていくとはあまり思っていなかったのです。個人として、特に原発についてどう動くかというのが先にありました。

ただちょうど後期課程の専攻主任というのをされていて、学部長、3学科の学科長、前期課程専攻主任の6人で学部運営調整会議というのを定期的に行っていたのですが、卒業式と入学式が中止になるという決定が、多分3月19日か20日ぐらいにされました。卒業式自体は24日か25日で、それが中止になったら、卒業証書をどうやって渡すかとか、その後の入学式で学生証をどうやって渡すかということの打ち合わせを、多分3月20日前後にするために、その6人で集まりました。そのときに大学として何か今回の震災に対して全学的に支援活動をするという予定はないのかということを学部長に尋ねました。その直前、2日ぐらい前に多分、その卒業式中止、入学式中止というのを決めた全学学部長会があったはずなので、学部長にそこでそういう意見が出なかったのかと訊いたら、そこでは特にそういうものは出なかったということでした。それですぐに卒業式の後に、今度は入学式をどうするかという全学学部長会を3月末ぐらいにやるので、ではそのときに訊いてみるということでした。その後のコミ福の学部運営会議が4月の頭ぐらいにあって、全学的に何かやると言っていましたかと聞いたら、いや別にやるというつもりはないようだという話でした。

そこでこれは何かしないといけないなということで、学部長と相談して、プロジェクト立ち上げの準備会を、4月11日だったと思いますが、行いました。その2日後の4月13日に教授会があり、その教授会でプロジェクトを立ち上げるときの趣旨文を11日に検討するというので、4月の8日、9日ぐらいに原案を書いていました。松山さんが仙台で活動しているときです。それで



森本 佳樹

13日の教授会で認められ、プロジェクトができました。

学生もそうだし、われわれもそうですが、被災した数日間、私たちはあまりすることがない、できることがありません。行ったら力仕事の話はあるとしても、専門職個人としても何かできるということはありません。しかしその次の生活というところになったら出番はあるということは神戸の経験からある程度分かっていました。避難生活のプロセスを考えるとときに、本当に緊急避難しているところから体育館などの避難所へ行って応急仮設住宅ができて、ゆくゆく2、3年後には復興住宅ができるというプロセスが大体分かっています。

本当に実現するかどうか分からないけれど、当時の菅首相から、8月末までに仮設住宅を全部整備するという話が出ていました。そうすると避難所生活の最後ぐらいから、仮設に移り始める頃に活動をスタートさせ、それを継続するというのが多分コミ福らしい支援のメインになるだろう。その際、繰り返し同じところに行って信頼関係を作って、そこの人たち、決められた範囲の人たちとずっと付き合うという活動の仕方になるのかなというのは、最初から思っていました。ということで、今に至る枠組みを考えたというのが4月13日の趣旨文です。

阪神・淡路大震災の経験

松山 その辺はやはり阪神淡路を経験しておられたので、被災してからの流れが分かっているということですね。

森本 そうなのですが、分からないことも多かったです。阪神のときには風呂に入らないでやっても時間ができたら歩いて阪急、阪神沿線に出て大阪に出たら銭湯もやっているし、食堂もやっているし、飲み屋もやっていて、また戻ってきたら次の日からまた頑張れるという状況だったのです。しかし今回はやはり一番近い大都市が仙台だったり、陸中の方などだと、そういう機能を持った都市というのはそれごとやられていたりしました。ですので、多分プロセスは想定したとおりになるだろうと思いましたが、実際の状況は分からないし、阪神と同じようにできるのかよく分かりませんでした。ただ分かったことは、どこかに拠点が必要であるというのはすごく強く思っていました。

松山 最初に6カ月ぐらいの準備期間を経て、9月、10月ぐらいから動ければという計画を森本先生が立てていて、私もそうだろうなと思いました。私も阪神・淡路のときを少し知っているのです。

森本 そのまま向こうに居着いちゃったのではないですか（笑）。

松山 阪神淡路のときは、私が行った菅原市場の近くなどは一帯が焼けてしまって何も残らなくて、そこに入ったのですが、やることはあまりないですね。そこから仮設住宅に移ったときに、仮設住宅の一室をもらい、やはり喫茶室みたいにして、毎日そこに2人ずつ全国から派遣させて、

そこでお茶を飲んだりコーヒーを飲んだり集うというのをずっと続けていました。そういうときになって初めて、この人間関係を使った仕事というのはそこからやれるのだなというのは分かっていました。ガレキ片付けなどについては学生がやれるのかもしれませんが、やはりこの専門性としてはもう少し後からできるという感じはありました。

森本 阪神のときにはあまりコミュニティという意識がされていなくて、今回はかなり同じところに住んでいる人たちができるだけ同じ避難所、仮設という形でやろうとしていたというのがあります。阪神のときには本当にゴチャゴチャに入ってきて、仮設ができるとまたゴチャゴチャになるから、一人一人の人にとっては、まず地震で自分が住んでいたコミュニティが壊されます。それで避難所に行ってややできかかったコミュニティが仮設に移るときに壊されます。それから仮設から出ていくときにまた壊れるという、3度コミュニティが壊れるのです。そのダメージをどうやって少なくするかとか、あるいはダメージはやむを得ないとすれば、次のところでどうやって早くコミュニティらしいものを作っていかすごく大事になってきます。そのこと自体をある程度私たちは知っていたということです。今度の東日本大震災のときには、各自治体も政策的に、できるだけ元のコミュニティを壊さないようにしたけれども、結局高台に元と同じだけの仮設の数を作るような平地を確保できないためにバラバラにせざるを得ないとか、南三陸町のように自分の町内ではそういう土地が確保できないので隣の登米市に作らなければいけないとか、そういうことも含めていくと、そういう思いの大事さはものすごく分かっているけど、実際は今回も必ずしもできていないのですね。そういう意味で移る都度に壊されたコミュニティをどうやって作るかというのはこれからの話になります。コミュニティ福祉やコミュニティ政策というところから見ると、そこにどうやって専門的に入っていくかというのは、すごく大事な話です。

復興支援室の開設とThree-Sの結成

森本 ところで、授業自体は5月の連休明けからということになったので、その前の4月の25日ぐらいからガイダンスをするので、1年生から4年生向けに、こういう活動を始めるというチラシを準備しました。それからひょっとしたらそのガイダンスの直後に「活動に行きたいのですが」という人が来るかもしれないので、支援室と、そこで相談に乗るスタッフの確保を25日までにやらなければいけないということになりました。たまたまコミサポに沖さんが週1のアルバイトで来ていたのを、プログラム・コーディネーターということでやってほしいと口説きました。また最初はコミサポに同居していましたが、支援室を立ち上げるというのを5月の入学式が始まる前ぐらいまでにやらなければいけませんでした。

次に、実際に授業が始まった後に、行きたいという学生をどこかに派遣しなければいけません。そのときは多分ガレキの撤去やドロ出しとかいう話でしょうし、教員はなかなか付いて行く余裕はないという中で、特に原発のこともあったので、安全に行ける、信頼できる団体で活動できるようにお願いをする仕組みと、それからそのときに心がけなければいけないことは何かということ伝えるために3日間の連続講座を開いたというのが5月の第2週ぐらいまでです。そういう

ことを大体4月からずっと準備していました。

4月末に復興支援室が開設され、沖さんがプログラム・コーディネーターとして常駐することになり、5月中旬頃からは外部の活動も紹介できるようになりました。そして6月にThree-Sが立ち上がります。このあたりの経緯について、荻生さんにお聞きします。

荻生 ちょうどこの復興支援プロジェクトが立ち上がったぐらいの時期でした。先ほど言っていた連続講座に参加してみたら自分以外にも100人位の学生がいて、非常に多くの学生が関心を持っているのだなと思いました。でもその反対に世間ではもう風化しているというか、ニュースも少しずつ震災の話題が少なくなってきて、みんなが忘れてきている雰囲気が出てきているのを見て、これは忘れていない場合じゃないと思いました。こんなに関心を持っている人がいるのだから、それを具体的な活動にどうにかつなげていかないと駄目だと思って考えていたところに、先生たちも実際現地での活動を始めるというのを聞いて、これはチャンスだと思いました。その中に、先生たちが企画して学生たちに参加を募る形だけではなくて、学生自身が活動を企画・実施して同じ学生に訴えかけていくという動きも必要だと思いました。そういう思いからThree-Sを立ち上げるにいたりしました。

森本 和さんは、当初から学生と一緒に活動を作ってきたというように、私は思っているのですが、そのあたりの経緯についてお話していただけますか。

和 荻生さんの話にあったように、復興支援室ができ、Three-Sという学生の団体が立ち上がりました。でも立ち上がったものの、では何をするかというときに、学生から「他大学の学生と何か一緒にできないか」ということを聞き、今これができるなと思ってまず実施したのが、東洋大学の学生たちとの交流でした。東洋大学でちょうど非営利活動論というボランティアの話をする授業を担当していて、その東洋大学の学生の中に、もともと被災地の出身で思いの強い学生がいて、実際に現地で活動もやっていました。それで「先生、この授業で被災地やボランティアの話をしたいです」と言われ、「そうか、ではうちの大学でもそういう思いがある学生たちがいるから、この授業で東洋の思いがある学生と立教の学生が集まって、座談会とは言わないけれど、いろいろ話をする機会を作ろうか」ということで、Three-Sのメンバーを東洋大学に連れて行き、受講生が300名の授業の中で座談会をやりました。荻生さんたちもドキドキしながら参加してくれ、立教大学と東洋大学の学生たちの被災地支援やボランティアに対する熱い思いを語りぶつけ合う機会ともなりました。それが1つ「きっかけ」となって他大学の学生同士がつながっていき、今後の色々な活動へと発展していきました。

このようなことは個人ではできなかったことだと思うのですが、学部のプロジェクトに関わらせていただいたり、大学でお仕事させていただいたりしているところで、学生の思いを少し形にできたかなと思っています。学生の思いを形にしたいという思いは、今でも強く持ってやっています。しかし、松山先生のように研究休暇を使われて被災地に住み込むことは、なかなか自分ではできませんし(笑)、そうなるとどうやって継続的に関わることができるかと考えました。

初めて被災地に行ったとき、そこに立った瞬間にその地域で生活していた人たちのことを感

じたり想像することができ、この地域の人たちのために何かできないかと強く思いました。まず被災地に行かせていただいたというあの経験は、自分にとってとても良かったです。とはいっても被災地は本当に広いですから、全てに関わることはできないので、ご縁があるところで自分ができるとして支援のお手伝いできたという思いで今もやっています。それが継続的に、自分は本当に微力ですけど、関わらせていただきたいというこの思いは、まず現地に行ったからこそ感じることでできたと思うので、まず行く必要があるのだと思います。コミ福の教員だからこそできることはあると思うので、この思いは大事にしながら今年度もしっかり取り組んでいきたいと思っています。

活動先の開拓

森本 学生が活動する準備が出来てくる中で、プロジェクトとして、どこでどのような活動をするかは、まだまだ手探りの状態でした。また、すでにお話したように、生活支援の段階を念頭に置いていたので、じっくり探そうというスタンスでもあったわけです。

ところで支援室としては6月ぐらいまでいろいろ準備をしていましたが、その間にいわて GINGA-NET や JEN やピースボートの活動に学生が個別に行くというものに対して、気をつけて行ってこいよ、というような形で送り出していました。

そのなかで、5月末に原田さんたちが先乗りで現地訪問し、その後もいろいろ情報を収集し、当たりがついたところで、松山さん、原田さん、和さん、沖さん、博士課程の院生の大口君たちと行ったのが7月でした。

7月に行ったとき、私が現地に行ったのはそれが初めてでした。ただ震災以前から付き合いのあった、今は活動先になっている石巻市の「めだかの楽園」という介護事業所が完全に被災したのは分かっていたので、それがすごく気になっていました。博士課程の院生の片山さんが CLC (全国コミュニティライフサポートセンター) 専門職ボランティアで5月の連休に行った時に、たまたま石巻に配置されて、そこで「めだかの楽園」の消息が分かったということがあり、訪ねてもらいました。個人的な「めだかの楽園」の支援は、5月の事業所建て直しの頃からカンパを集めたりしていました。だから7月にみんなと一緒に陸前高田や気仙沼に行った帰りに、私と大口君は「めだかの楽園」に行って何ができるかという話をしてきました。

松山 そのときに陸前高田、気仙沼を回り仙台の社会福祉士会まで一緒でした。

森本 南三陸の志津川中学校の上まで一緒に行って別れたのですね。

松山 そうですね。そこで別行動となりました。

活動の開始

森本 こうした経緯を経て、最初に、学部のプロジェクトとして正式に学生を派遣したのは、7月の末から8月頭にかけての石巻の川開き祭が最初でした。次が8月の半ばから後半あたりに、空閑先生たちが南三陸に行きました。それから9月になって大島に行って、7、8、9月ぐらい

からそういう形で始まってきました。気仙沼大島の中心になっていた湯澤先生は今日はいらっしゃいませんけれども、少しその辺りを話していく必要があるかと思います。

石巻は先にも話しましたが、私がもともと付き合いのあった介護事業所「めだかの楽園」があって、片山さんたちが見に行つて、再建するという話もいち早く聞こえてきていました。そのお金を集めるというのを個人的にしていたのですけれども、実際に6月に片山さんたちが引越しの手伝いに行つてくれました。その頃から、川開きがあるからそろそろうちの活動としてできるかなということを考えていて、最初に行つたのが7月末です。そのときに荻生さんもいたのですよね。やってみてどんな感じでしたか。

荻生 最初は本当に、思っていたより皆さん元気だなというのを思いました。事業所の利用者さんと一緒にお話ししたりレクしたりするのですが、そういう中でもそんなに暗い表情や被災されて辛かった話などはあまり出てこなくて、皆さん結構お元気だなと思ったのですが、川開き祭りに参加してその中で灯籠流しで、一つ一つの灯籠にご家族を亡くされた方のメッセージなどが書かれていました。それを実際に手に持って組み立てたり流したりする作業のお手伝いをしたときに、見えづらいところに被災地の苦しみというのはあって、それに今後被災された方は向き合っていかなければいけないということを考えると、これからが本当に辛いのではないかと実感し、そこにどう寄り添っていけるだろうかということを考えました。実際に活動に参加してみて、会いに行つてお話ししてという活動は、ガレキ撤去などとは違い、なかなか目に見えない成果ですよね。ですので、最初はこれが何の役に立っているのかなと思っていた時期もあったのですが、継続して参加することで徐々にその成果が分かって来たというか、この活動をやっている意味を実感できているかなと感じます。

森本 それ7月で、しばらくは2か月ごとぐらいに石巻に行っていたのです。それが今はもう少し間隔があいて、向こうが来てというときに行くぐらいで、こちらから組み立てて行くことはしなくなっています。あまり無理のない程度というか、あとで少し話が出ると思いますが、向こうにコーディネーターがいて、そのコーディネーターがコーディネートしてくれる上に乗っかるというような形にしようとする、そんなにこちらから行きたいとか、いついつ行くというようなことには、なかなかならないというのもあります。

南三陸は河東先生経由で宮城女子大の佐藤先生が仲介をしてくださり、空閑ゼミで行つて、その後9月に私のゼミで行っています。その経験で私が強く感じたのは、現地のコーディネーションがうまくできない、する人がいないと活動が充実しづらいということでした。佐藤先生に全部お願いするわけにいかないわけですから。それからもう一つは交通の便が悪くて、学生が行くにはちょっと行けないし、泊まる場所もありませんでした。だから南三陸自体のダメージが大きすぎたということもあるのだろうと思うのですが、活動先として定期的に行くにはちょっと難しいかなと、空閑さんの話と私の経験から判断しました。やるとしたらもう少し後になって条件が整ってからなのかなということです。そのときに全カリでもゲストスピーカーに来ていただいた南三陸町の福祉アドバイザーの本間さんにお会いして、こういう人が多分条件を作っていくこと

になって、それからまたどこかで私たちが行く機会はあるかなと思っていたのです。

陸前高田で家を借りる

森本 次に陸前高田ですが、いま家を借りていらっしゃるんですね。それを借りる経緯になった、間に入っている高梨さんとはどこで会われたのですか。仙台ですか。

松山 そうですね、仙台のボランティアは各専門職団体から1名ずつ派遣されてチームを作るボランティアで、作業療法士会から派遣されてきた高梨さんという方が、実家が陸前高田にあるというふうに聞いていて、いずれお話ししようかと思ったのですが、そのときは話さなかったのです。しかし7月ぐらいに連絡をとって、陸前高田で支援したいので紹介してほしいということと、拠点となる場所を探しているという話をしました。最初は実家を使ってくれと言われて、実家にあいさつに行ったのですが、やはり人が住んでおられる家の一間を借りるというのは、学生を連れて出入りが難しいかなと思っていました。するとちょうどすぐ近くに、二次避難所になっていた家で、皆さんが仮設に入るので貸してもいいと言われて、それで間に入ってもらって借りることができたということです。仙台でのつながりが、そのままずっとつながって、今でも随分お世話になっています。つながってきています。

森本 向こうに行ったら家族の一員のようなのでしょうか。

松山 そうですね。お風呂が壊れたら入りにおいでとか。

森本 それは松山会館でしょうか。どこに行っても知り合いがいますよね。

松山 地区の名前が松山地区だったので、みんな笑いながらすぐ覚えてくれました。

森本 その高梨さんから家を借りられるかもしれないという話が出たのが7月ぐらいですか。

松山 そうですね。7月に学部で行ったときには学生部が数年前から林業体験をしてきた「炭の家」のある生出地区おいでのほうに視察に行って、生出地区の公民館などを宿泊場所に使っていていいよと言って下さったのですが、あまりに市内から離れていて、そこを拠点にするのは難しいと思われました。そこでそのあと私が高梨さんに話をし、8月7日、ちょうど七夕のお祭りが復活した日だったので覚えているのですが、その日に行って高梨さんと話をしました。そのとき私は、翌年研究休暇の順番が来るので絶対に休もうと思っていました。家を借りる際に、「貸して下さったら1年間住みたいので是非」というお願いをしました。いくつかの団体が申し込みしていたのですが、「そこまで言うなら貸してやるよ」といった感じがありました。それで貸していただけることになって、学内手続き的にいろいろな手続きを経て、ようやく11月3日にサポートハウスの運営委員会を立ち上げて開所式という形になり、11月から正式に使えるというふうになったのです。11月20日からわたしのゼミで行ったのが最初でした。

森本 そういう意味では、南三陸を含めると4か所ですが、現地の行政や社協などのボランティアセンターとつながった活動になっていないのですね。それは最初、そして今もそうですが、いい部分と、もう少しつながっていても良かったかなと思う部分と両方あるのですが。だから最初に陸前高田に行ったときに、社協の災害ボランティアセンターに挨拶に行ったり、たまたま私の

知り合いの岩手県社協の職員が出向していたので、そこに入って行く可能性もあったわけです。けれどもそのとき、災ボラの下で活動していたら、一兵卒的で単発の話にしかないのではないかという感じがしたし、今もそう思うので、継続的にやるとすると今のような形にならざるを得なかったのかもしれないなという気がします。

松山 石巻もそうですが、泊まる場所があるというのがすごく大きいです。特に陸前高田は、団体がたくさん来ていましたが、みんな遠野とか。

森本 登米とか。

松山 一関とか、花巻から来ている団体もありましたし、2時間、3時間かけて来て、活動中トイレに行く場所もなくて、3時ぐらいに帰らなければいけないという状況の中で浸水地域のすぐ近くに家があって住めるというのはすごく大きいですね。

森本 それにしても大学がものを借りたりもらったりするのは手続きが大変ですね。

松山 そうですね。車ももらったのですが、大学のものになるのに半年かかりました。その間ずっと駐車場に置いてあるという。

森本 スタッドレスタイヤでももらったけども使わずに、使うときは春になっていたので外して使った（笑）。

先ほども出ていましたが、これから後、首都圏直下型地震や東南海地震などというときに、大学というのは一大資源です。大体建物は震度7でも壊れませんとあちこちに書いてあるぐらいしっかりしています。それなりの社会的役割があるのだらうという気がします。

大島での活動

森本 大島は、21世紀社会デザイン研究科の石川先生から、3,000人くらいという適当な人口と大きさで、1学部としてやっていくには適当かもしれないというヒントをいただきました。石川さんはそのとき気仙沼市の親善大使をしていたので、そういうのもあって、最初に大島に行った7月には石川さんも一緒に行ってくれました。その後湯澤先生や松山先生も再訪されました。

松山 そうですね、一応私がつないでいって。

森本 いろいろな宿にばらけて泊まったわけですね。

松山 最初に石川先生と一緒にいったときは同じ民宿に泊まりました。石川先生の見方は本当に鋭かったなと思うのです。ちょうどいい規模で、学部でやるのによいのではないかとと言われて。その助言もあって、2回目に行くときは、とにかくみんなでいろいろなところに泊まってみて、いろいろな話を聞いてみよう、と、ばらけて泊まったのですが、たまたま湯澤先生が泊まった旅館のご主人がPTAの会長をしていたのです。それで自分の子どもに勉強を教えて欲しいなどという声を聞きました。次に私が陸前高田に行った帰りに寄って、それをどういうふうにやれるかを話したのですが、1人の人のための家庭教師に学生を送るのはちょっとどうかと思ったのですが、でも旅館の大広間を会場に貸してくださるということと、子どもをできるだけ集めるとか、学校ともつながっていくというお話だったので、ではこれを定期的にするかどうか、持ち帰っ

て話をしますということで、8月の最初にそういう話をして、8月にもう1回行って、具体的な調整をして9月からスタートしました。それも泊まる場所があったというのが大きいですね。

森本 だから明海荘の村上さんが場所の提供とコーディネーションをしてくれたということまでできたという感じですよ。それがすごく強いと思います。

松山 今回は、やはりどこの被災地も宿泊場所がなかなかなくて、ボランティア団体はみんな苦労していましたから、泊まれる、食事が食べられる、そして広間があって、小さい島ですから誰かが声をかければ集まってくるという、すごくいい条件だったと思います。

森本 和さんは、大島の引率に何回か行っていただきましたが途中からになりますか。

和 そうですね。

森本 学習支援の活動が定着してから、先ほどいった流れの中で、明海荘さんを使って、それから次に学校を使わせてもらって、また今は開発センターになっていますが。その辺で学生がどういうふうに変まっていくかとか、学生がどんなことを感じているかといったことはありますか。

和 はい。まず大島に一番はじめに行った時に、復興支援本部がありました。そこで聞いたニーズで、高齢者の方々が健康体操や太極拳をやっていたのにやる場所がないというものでした。それで杉浦先生にお声掛けさせていただき、運動と食事のサポートをすることとなりました。今では仮設住宅の高齢者の方々が、杉浦先生や若い大学院生が来ることを心待ちにしております。これも高齢者の方々が元気になるには必要なことです(笑)。このように、スポーツウェルネス学科の専門領域である運動や栄養なども今の島で必要なことだと思いますし、学生たちが勉強お手伝い隊で子どもたちの学習支援の中で遊びやスポーツをすることは、子どもたちのリフレッシュにもなるのでとても良い活動だと思います。大島の人たちに会いたいという思いで、リピーターの学生が多いのも大島の活動の特徴です。大島担当の湯澤先生を中心にRAの活躍もあり、大島の活動は参加学生も多く、島の方々にとっても大切なものとなってきております。このような活動を続けていく中で、学生たちの中から、「大島の人たちのためにもっと何かできないか」ということで、色々な企画も立ち上がっています。このように、学生の気持ちや行動も変化してきており、今までの活動を基盤としたさらなる活動の展開が求められている段階だと思われます。

大島はとても小さい島なのですが、私たちが関わっている活動は島の一部なので、もう少し何かコミュニティの再生を考える、また福祉の今後のサービスなどを考えるのであれば、勉強お手伝い隊の支援と併せて、学生ももう少し違った側面で関わっていけるような展開ができると、より一層大島で私たちができること、学生ができることが、広がり深まるのではないかということを感じたりしています。

リピーター

森本 荻生さんに聞いたほうがいいかもしれませんが、学生がレポートするという気持ちとか、何回も行こうと思ってくるのはどういう中ですか。頭の中がどういうメカニズムになって行

きたいと思うのでしょうか。

荻生 最初のころは、本当に関わっている現地をどうにかしたいというか、何とかして力になりたいという気持ちで行っていたのですが、それが少し徐々に変わって行って、そこに住んでいる人に会いたいからとか、その場所が好きだから行きたいとか。だから私はもうボランティアしに行くという感覚ではないのです。そこにいる人に会いに行ったり、遊びに行ったりする感覚に近いです。Three-Sの学生でもずっと同じ被災地に行っている学生もそういう感覚を持っているのではないかと思います。その場所をどうにかしたいという使命感だけでは活動は続かないと思っていて、その中に会いたい人がいるとか、そこでの活動が楽しいとか、そういうものがないと、長く活動は続けられないのではないかなと思っています。

森本 高田のリピーターは高田にしかいかないし、大島のリピーターは大島にしかいかない。石巻もそうですけれど、固定化しています。例えば自分がやっていることを客観的な位置取りとして見たいとか、よそでどのようになっているのだろうかというような欲求はないのかなと思ったりします。ただ不思議なのは、大島に行っている学生が新宿で活動したりしているのですね。新宿は割とあちこちの学生がかぶっているのかなと思います。それは学習支援が共通なのかちょっとよく分からないのですが。だから自分が行っているところをたまに変えてみるのもいいのではないかなと思うのだけれど、そういうのは、荻生さんも学生のときは実際には石巻ばかりでしたか。

荻生 石巻ばかりです。でもそうですね。やはり一か所にずっと行くのもいいと思うのですが、この間初めて陸前高田に松山先生と一緒にいったときに、他の場所に行ってみて、そこにまた会いたい人ができたりその場所が好きになったりとか、そういう場所が自分にとって増えていくのってとてもいいことだなと思いました。

森本 それだけ忙しくなるけれど。

荻生 忙しいのですけれど。でも、例えば石巻の活動だと、地元で昔から伝わる「石巻やきそば」を通して町の活性化を目指す、石巻茶色い焼きそばアカデミーの人たちとも繋がりががあります。アカデミーの方たちはみんな気の良いおじさん、お兄ちゃんみたいな人たちなのですが。つまり私にとって石巻には、石巻のお父さん、お兄さんみたいな人がいるわけです。陸前高田に行っ



荻生 奈苗

ら今度は陸前高田のおじいちゃん、おばあちゃんがいる、何かそういう感覚ってすごくいいなと思います。何かあったらそこに行こうと思うし、例えば結婚しますとなったときにこれがダンナです、いかがでしょうみたいな感じでやったりとか（笑）。そういう場所が増えるのって、すごくいいことだと思うのです。

森本 みんなそこまで考えているのかな、リピーターの人。これがダンナですって（笑）。

荻生 考えていないかもしれません（笑）。

松山 でも陸前高田は本当に個別的な濃い関係を作っている

ので、その後手紙を出し続けていて。

森本 ダンナを連れてこいよといったことを吉田さんとかみんな言われるのですか。

とは言っても、あちこち見て回るゆとりもないのでしょうか。

荻生 私はもともと色々なところに行くのが好きなので、みんながみんなそうであるとも限りませんよね。

旅費の補助について

森本 9月ぐらいから本格的に活動が始まって、大島で1回目、2回目とやってみると、3回目になると、誰かがもう1回行きたいと言いだすわけです。その頃、旅費は自費でしたから、リピートするにはお金が足りないという話になって、それではお金を作らなきゃということになりました。そして今後を考えたときに、リピーターを増やさなければならないというのは明らかだったので、どうやって金を作るかというのと、リピーターがどれだけ増えるのかという金勘定が私の頭にはいつもありました。学校の中で手だてできる学部運営費、学部管轄予算からは学生の交通費は出せないというのがあったので、11月に赤い羽根共同募金のボランティアサポート募金が採択されていなかったら頓挫していたかもしれないです。ちょうどいい具合にリピーターの3回目ぐらいからお金を出せるようになりました。それにコミ福の動きにつられて大学の支援認定(ボランティア援助金)の制度ができていく。支援認定も最初限度額が結構低かったのを、こちらが赤い羽根をとった勢いで高い補助基準を出したら向こうも合わせてきたという感じでした。そういう意味ではついてたというか、何とか財源が足りないということがなく、今までできています。と言っても、いつも財源は心配しながらやっているのですが。

荻生 交通費が出るというのは本当にありがたいです。今ではもう当たり前みたいになってしまっていますが、最初に全くお金が出なかった時期に参加していた学生からすると、「あ、貰えるんだ。ラッキー！」みたいな感じです(笑)。今もお金が返ってくると、出したお金が戻ってきたというより、プラスでもらってしまったような感覚があって。本当に学生はお金があるかないかで活動に参加できるかできないかが決まるので。

松山 1回3万円ぐらいかかってしまうので大きいですね。

荻生 そうですね。3万円って1カ月のバイト代の半分は超えます。

森本 そんな6万もバイトしていたら授業に出られませんね。

荻生 そうですね(笑)。

松山 旅費の補助は11月20日の活動から出たのです。11月でした。

森本 しかも半額出るという。

松山 リピーターには4分の3も出ると、これはすごく大きいです。

荻生 ワーッとになりました。お金を貰えるのだ!と。

森本 だから2012年の3月末で赤い羽根が終わって、4月から次の助成金が決まっていなかったもので、もう1回全額自己負担してもらおうという選択肢が私の頭にはあったのです。支援認定が通

らなかったらそのまま全額にせざるを得なかったので。

活動先のいま

森本 時間も迫ってきているのでまとめていきたいと思います。いま、実際に活動を始めて1年10か月ぐらいたっていますが、それぞれ簡単に現地の状況を、何がどう変わったかについてお話し願います。学生がどう変わったかはまた後で聞きたいと思いますが、まず現地の状況をお願いします。一番現地を知っている松山先生から。

松山 陸前高田は昨年私が滞在していたこともあるし、学生が行く回数だけじゃなくて、実際に顔を会わせる回数が多かったし、今春大学院前期課程を修了した大塚君が現地のNPOに就職して、サポートハウスにいてくれて、家を少しずつ開放しはじめているいい流れができています。最初は個人的な関係からスタートしているのですが、少しずつ友達を呼んで来てねというふうになってきました。一つの仮設に固まらないで、いくつかの仮設の人たちが来たり、地域からも来てかまいませんというふうにしているので、そういう広がりが出てくると思うのですね。ただ今後は、サポートハウスの周辺に今すぐ家ができて、それからもう少しするとあそこに4階建ての復興住宅ができます。そうすると先ほど言っていたコミュニティがどういうふうになっていくのか、外から来た人がそこのコミュニティに入れるかという課題があります。今近所の方に、新しく家が建っただけのおばあちゃん1人で住んでいる人がいて、どうも孤立しているらしいと聞いたので、その人を今度誘おうかなと思っています。そのように誰かまた特定にお誘いしながら、新しくできた住宅の人たちと関わるようなことができたらいと思っています。

森本 松山地区というのでしょうか、あそこは会館がありますね。あそこを管理しているのは区長さんですか。

松山 そうですね。

森本 地域の取り組みとしてその地区のサロンをするというような動きはないのですか。

松山 それはないですね。家のある人たちは、自分たちは家があるから被災者ではないという意識が強くて、実際に被災した人たちにどう声をかけていいのかわからないという感じなのです。

森本 それでは新宿と一緒に学生がつなぐといった話はいっぱいあるということですか。

松山 そうですね。誰かが橋渡しをして、一緒にやる場面を作ったほうがいいですね。

森本 ところで、新宿の話を全然していませんでした。最初のビジョンで、やはり現地に行けない学生がいるだろうということと、それから今回の震災に関していえば、現地から避難してきている人もたくさんいて、それこそ福島県の郡山のビッグパレットのように近くに避難している人もいるけれども、さいたまアリーナとか味の素スタジアム、あるいはその後の赤坂プリンスホテルなどに避難されてきて、松山さんが先ほど言われた大学を避難所にすれば関われるというのと同じ発想ですけど、学生が自宅にいながら支援ができるというルートをどう開拓するかというのが一つの課題でした。最初、大石先生と和さんに旧騎西高校に避難した双葉町住民に関わってもらったりしていたのですが、なかなか難しいところでした。その後どうしようと模索していた

ら、たまたま東京都が避難者の孤立化防止事業を始めるという話があった。それを東京都社会福祉協議会が受託して、実施は市町村社協に委託するという話が聞こえてきた。そこで都社協の担当者に聞いたら、アドバイザーになって欲しいということになりました。それで半分「えっ」と思いながら、「しめた」ということで、その連絡会に出て、きっちり受け入れが出来て、さらにコミュニティワークが出来そうなところはどこかというのを探って、新宿に行き当たったという感じです。新宿は、自治体も含めて熱心に行っているの、そこにもともと早稲田が入っていて、その後学習院女子大とかも入っていたのですが、大口君たちが入って行って、イベントのときに人数も必要だということでジョイスタディプロジェクトというのを作りました。今10大学が関わっていて、それはそれでとても面白い実践になっています。その一翼を、プロジェクトが支援しつつThree-Sがやっているという状況です。

それで今の状況ですが、これまで学習支援や夏祭り、鍋大会などをやってきたのだけれど、今年の2月ぐらいに、ジョイスタの学生たちは定住支援を中心に行うということに方針を決めました。たしかに、帰還支援をしても帰還した後のフォローができるわけではない。定住したい、しようと思った人をどう地域に「馴染んで」いってもらうか、元から住んでいた人たちに、この人たちをどう地域の一員として迎えてもらうかということに注力するということです。このように、被災地よりも課題が先に出てきています。このことは、陸前高田で高台移転してきた人と、そこにもともと住んでいた人たちと、どのようにコミュニティを作っていくかというこれから起きるであろう問題とよく似た問題が、すでに起きているということです。

松山 全カリの授業で新宿のことを聞いたときに、「定住支援に重点をおくと決めた」というのはすごいなと思いました。こうした活動はどうしても被災者支援のほうに行きたくなるのですが、そうではなくて、団地全体の活性化をどうするかという視点を持っていたのだということですよ。そこは本当にいい視点だし、そうしないとだめなのでしょう。もともと住んでいた方も高齢化しているし、いわゆる高齢化社会の縮図みたいなところで団地全体を活性化するというのは、またあちこちのモデルになるような、すごくいい取り組みだと思いました。

森本 石巻はどんな感じですか。現地の状況とこれからは。

荻生 2年たって思うのは、これまではやはり自分の生活などを立ち直らせるのにいっぱいいっぱいだったと思うのです。仕事を見つけたり、家をどうするかなどです。2年経って少し一段落したときに、それまで忙しく動き回っている中で忘れていた、これまでの生活を失った悲しみや、ご家族や大切な人を失った悲しみというのにこれからまた改めて向き合っていかなければいけないのかなと思っています。それを考えるとこれから孤立死や自殺が増えてしまうのではないかと考えています。それにどう寄り添って行けるのかと考えたときに、やはりコミュニティや地域をどうしていくかということに繋がっていくと思います。しかし、そこにアプローチしていくとなると学生の知識だけではきっと十分ではなく、専門的な知識が必要になると思います。そこをコミ福の先生方とこのプロジェクトと連動して、学生としても関わっていけたらいいなと思っています。これは石巻だけではなくて、他の地域でも言えることなのではないかと思っています。

森本 「めだかの楽園」がもともとあった南浜と門脇という壊滅的なダメージを受けた地区が、今後、蛇田というところにコミュニティごと移転するという市の計画が進んでいます。その蛇田のちょっと上の高台に「めだかの楽園」も移るとい話も進んでいます。いわば、全部リセットして作り直すということです。私たちは今後、そこへどう関わるのか、関われるのかをこれから考えていく必要があると思います。だからむしろ例えば今仮設などにいる南浜や門脇の人の引越など手伝ってあげたいと思っています。あるいは「めだかの楽園」が蛇田で再オープンするときに、例えばそこにできるサロンを媒介に地域に関わっていくとか、少し考えていかなければならないと思います。「めだかの楽園」はそういうやる気が強く残っているところなので、「めだかの楽園」と一緒になって見つけていければいいと思います。大島については、湯澤さんがいないので、今日は語れる人がいないのですが、先ほど和さんが言ったように、もう少し広がりをつける必要があるかもしれません。大島中学校の仮設住宅はいつまでいられるのでしょうか。

松山 あと1年ではないでしょうか。大島の場合はほかに移る場所を作らないとできないですものね。でも阪神・淡路のときもそうですが、結局1年ずつ、少しずつ延ばすのですね。最初から思い切って延ばせばいいのに。だからみんなが見通しを立てられないのですが。今回もまた延ばすのではないかなと思います。

森本 そうしたことも見据えて、もう1回大島の地域アセスメントをする必要があるかもしれませんね。

松山 そうですね。

森本 震災から2年たって、それなりに落ち着いてきて、いろいろとつながる余地も出ているかもしれません。さっき和さんが言っていたように、島全体の規模としては、学部が全体的な展開をする余力があるのではないかと思います。

支援室とThree-Sの現状

森本 あと今の委員長として、支援室の課題と今後というのはいかがですか。

松山 そうですね。やはりまずは予算ですね。今年は何とか定期的な派遣は1年分はありますけれど。

森本 今日ちょっと検討したら、少し足りないということですが。

松山 そうですね。もう300万円くらいは。ただ、年間3,000万円ぐらいの活動ができていているというのはとてもいいこととか凄いことだと思います。やはりこれを続けていく、今全カリで授業をしていて140人が受講して関心を持っている学生が既にいるわけですから、まずはその学生たちが行きたいと言ったときに確実に行けるような態勢をとって、とにかく見てもらいたい、そして関わってもらいたい、そこを続けたいですね。全カリもまた何年か続きますので、そこで活動する学生たちをもう一度継続させていくという。私たち教員はそのバックアップですね。お金をとって、安全に行けるところを開拓して、安全に行き来してもらおう。やはり学生のパワーは凄

いのです。おじさんが1人歩いていてもあまりいろいろなことは起きないのですけれど、学生は歩いているだけでいろいろなことが起きますから。私は学生のことを最強ツールと呼んでいます。最強ツールが現地にとんとん行って、パワーもあるし、明るさも届けられるし、元気も届けられるし、いいと思うのです。ずっと大学生はいるわけですから、ずっと送り続けていけるようにしたいと思います。

森本 支援室と1学生の登録関係だけだと、その学生が卒業してしまえば終わってしまうけれど、Three-Sという団体があることによってサークルとして継続していく。だから、そこにつながっている学生は次から次へと補充されます。全カリの授業でそういう意識を持った学生が、直接支援室に登録するのもいいけれど、活動としてThree-Sのようなサークルがあるということが、継続の上で非常に有効です。Three-Sをツールで見ているわけではありません。

松山 そうですね、学生が主体的に動けるのはいいですね。

荻生 Three-Sを立ち上げたときに、いろいろな立ち上げ方があったと思うのです。インカレのように色々な大学の学生が入れるような形もあるし、もちろん学内のサークルとしてもあります。その中でもコミ福のプロジェクトと連動するような形で団体を立ち上げるというふうに至ったのは、継続的な活動をするようになった時に、いつか専門的な知識がないと活動を続けられないという時期が来ると思っていたのです。学生は勢いがあるので、最初のとっかかりのようなものは、専門家の方たちより早いと思うのです。ワーッと入って行って、ワーッと活動するという。でもそれでこれまではやってこられたと思うのですが、もうここからは被災地で必要とされていることも勢いだけではどうにもならない部分になってきているのではないかなと思います。コミュニティの再生や、被災された方の心理的な支援など。そうなったときにやはり専門家の意見や知識が必要になります。コミ福の先生たちはその道のプロでいらっしゃいますから、活動に対する意見だったりアドバイスだったりを頂けるかなと思い、そういう流れでコミ福の中で立ち上げたのですが、ちょうどその専門知識が必要になってきている時期が今だと思うのです。ですので、プロジェクトチームとThree-Sがうまく連携してやっていくことがこれからは必要だなと思っています。学生の勢いはまだまだあるので、それと先生方の専門知識を合わせたら、すごく良い活動が展開していけるのではないかなと思っています。それから学生は、参加を促すことは出来るのですが、それをどう継続につなげていくかというのが永遠の課題だなと思っています。そこをみんなで考えながら、より多くの学生が活動に継続的に関わってってもらえるにはどういうアプローチをしていったらいいのかなというのを、学生たちと一緒に…私も学生ですけど、考えていきたいと思っています。

森本 大学院生の役割ではないですか。

荻生 そうですね。頑張ります。

森本 だんだん専門家になっていくわけだから。

松山 荻生さんの修論のテーマですしね。(笑)

森本 Three-S自体はそういう意味では非常に期待しているわけだけれど、なかなか専門性や、



和 秀俊

あるいはそのときのメンバーの個性などがグループとしてのダイナミクスを作るので、必ずしもワーツと行けるときばかりとは限りません。あるいは試験があったり就活があったりして忙しかったり、別に属している部活やサークルがあったり、そういうことがあっても、全体として安定的に継続していけるようなサークルとして育てていって欲しいという期待はあるわけですが、そういう中で顧問をお願いしてどんなふうに見ておられるのか、それからプロジェクト全体に関しての「まとめ」も含めて、和さんをお願いします。

和 まとまらないと思いますが…。Three-Sで荻生さんが1代目の代表で一番勢いがあって、2代目の大館君のときは思いが強くて、現在は3代目の君塚君が頑張っています。どんなボランティアな組織でも3年目というのは、これさえやっておけばいいというような慣れが出てきて勢いがなくなってきます。今のThree-Sも慣れだけではないと思うのですが、これをやるのが当たり前というのがあって、少し業務的とはいいいませんが、学生の思いを形にするという勢いやパワーは、ちょっとなくなってきているところが見えているので、やはりThree-Sも3年目の今年が大事だと思います。Three-Sがなくなるか、継続するかの大事なところなんです。このようなときには新しい風を入れるのが必要だと思いますが、この間のZEROバスで、新しい風や勢いを持ってきてくれそうな学生が何人か出てきているので、そういう学生たちを今後どう巻き込むかというのが重要だと思います。やはり思いを形にするというところから始まったThree-Sですから、それをもっとやっていくようにしないと、学生たちも活動に関わっていても楽しくないというか、活動を業務的にそつなくこなしていけばいいのではないかという雰囲気となってしまいます。先ほど荻生さんも言っていましたが、関わっている学生たちが活動を楽しめるようにしていかないと活動が継続できなくなってしまう可能性があるというところが、今のThree-Sの課題になっているかなと思います。とても素晴らしい学生団体ですから、教員が入り込みすぎでは駄目だと思いますが、活動が継続できるように、より良い活動ができるように、顧問というよりお世話役として、ちょっとアドバイスをさせていただければと思っています。

森本 さっき荻生さんが言っていたように、そこが好きになって、そこに会いたい人がいるから行くという形で、それが長続きする要因で、現地のために何かするという感じではなく、一緒にとか、ずっと付き合うというような感じになってきています。あまり何かしてあげるとか、しなきゃいけないだけでやっていくというのは、和さんが言ったように業務みたいになってしまいます。楽しいということを前面に掲げるのはちょっと不謹慎な聞こえ方になってしまうかもしれませんが、でも楽しくなければ、それから意味があると思えないと続かないと思います。そういうスタンスでこれからも活動を探していかなければいけないと思います。

松山 今大石先生が研究テーマにしているのはポジティブ心理学というものです。ポジティブな

体験と一緒にすることで癒されていくというものがあるので、業務としてやるというより、ポジティブな体験をこちらは作ればいいのです。陸前高田も少しそういうことを意識して、一緒に食べるご飯を作ってもら、してもらいよりもしてあげるといふか、そういう感覚に持っていています。そうすると本当におばあちゃんたちは喜んで郷土のおやつをいっぱい作ってくれて、「うちの孫たちは食べないんだけど、なんで大学生はこんなに喜んで食べてくれるの。」と言いながら、毎回作って下さって、そういう力が出てくるのですよね。すると学生も楽しくて楽しくて。夜なんか道路に寝っ転がって星を見ていくことをやっているの。

和 星はどこにいてもすごいですね。

松山 大島でも1回道路に寝っ転がってみたら。

和 少しゆとりが必要かもしれません。

〔3.11〕とは何なのか

森本 時間がそろそろ迫ってきました。まとめるつもりもないのですが、3.11を世間はみんなが忘れてしまっているような気がしてならないのですが。政治的な発言はちょっと慎むとしても、あの地震の多い、テロもあるかもしれないトルコに原発を売ろうとしているというのは何なのだと思います。そういう意味では3.11というのは、日本がそれまでしてきたこと、これからどうするのが問われたと思っています。何もあんな問われ方をされる必要はなかったと思います。

そうするとそこから復興するとか再生するということはどういうことか。再生の仕方、それが問われるわけです。だから、そこに関わっている人たちがどういう気持ちで関わるかということが、その復興や再生に影響していくと思うので、やはりちゃんと向かい合わなければいけないし、向かい合い続けなければいけないと思います。

コミュニティ福祉学という観点から言えば、結論が出てからどう動くか見定めるといふよりも、動きながらよりよい状態を目指すといふか、また自分たちが動くことで周りが動き出すといふ、そういうことが重要だと思います。やり続けるしかありません。それからそうはいってもできるだけ消耗しないで、気軽にとか気楽にといふと語弊があるかもしれないけれど、自分にとっても現地にとっても効果の高いやり方というのをもっともっと考えていく必要があるような気がします。こんなところでまとめてしまったけれどいいですか。

松山 一言だけ。私の授業で言っているのですけれど、学部の理念が「命の尊厳のために」というものですが、理念的で分かりにくいのですよね。分かるようで分からない。だけれど被災地に行くとそれが分かります。生きていることがどれだけ大事かということが本当に身に染みて分かった人たちが、一言一言そういうことを言ってくれるのです。それが大事です。学生に、「何もなくてもいいから、来てくれればいい、居てくれればいい。」と言ってくれます。「よく来たね」「あらかわいいね」と、最初からおばあちゃんが言うのです。名前も知らないけれど、居てくれることがとてもうれしいと言ってくれるのです。そういう「存在を喜んでもらえる体験」は

なかなかできないので、そういう体験をしてほしいです。そういうところから学部の理念を感じて、そして、何もしなくてもいいので、ではまた行こうとか、自分が居るだけでもいいのだったらこれは自分にもできるという、そういう感覚を持ってくれるといいなと思っています。

和 学生もそうですし学部の教員もやはり継続的に多くの学生も教員も関われるようなきっかけや仕組みを作っていくことができたらいいなと思っています。

荻生 私も活動を始めた時はボランティアとして活動に参加する一学生でしたが、現在は大学院生として、学生の活動をサポートする側になりました。客観的に学生の活動を見るようになって、自分のことだけ考えていても許される大学生という時代に、自分以外の誰かのために一生懸命になったり、悩んだりしている多くの学生たちを見て本当に素晴らしいなと思っています。なので今後私もより多くの学生に継続的に復興支援に関わってもらい、充実した活動を行えるようにサポートしていきたいと思っています。

森本 今日はどうもありがとうございました。

(この座談会は、2013年6月17日に行われました。)